

蛙の王女 ロシア

昔むかし、あるところに、王さまとお妃がいました。おふたりには王子が三人ありました。三人とも、話に聞いたこともなければ、絵でも見たことがないようなりっぱな若者たちでした。末の王子はイワンと呼ばれていました。

ある日のこと、王さまが、王子たちを集めていいました。

「おまえたちも年頃になった。それぞれ矢を一本ずつ射て、矢が飛んで行った先にいる娘と結婚しなさい」

上の王子が矢を射ると、矢は大貴族の屋敷に飛んでいき、その娘の部屋の前で落ちました。そこで、上の王子は大貴族の娘と結婚しました。二番目の王子の矢は、商人の屋敷に飛んでいき、玄関に立っていた娘の前に落ちました。そこで、二番目の王子は商人の娘と結婚しました。

イワン王子が矢を放つと、矢は沼に落ち、蛙が矢をくわえてひろいあげました。イワン王子が、

「いくら何でも蛙なんかと結婚できない」というと、王さまは、

「いや、これがおまえの運命だ」といいました。イワン王子は、しかたなく、蛙を妻にむかえました。

ある日のこと、王さまは、三人の王子を呼んでいいました。

「あしたの朝までに、わしにやわらかな白パンを作るようにと、おまえたちの妻に伝えておくれ」

イワン王子はしよんぼりと自分の屋敷に帰りました。蛙の妻は、

「どうしてそんなに沈んだ顔をしているの。お父さまから何かいやなことでも聞かされたの」とききました。イワン王子は、

「父さんがおまえに、あしたの朝までにやわらかな白パンを作るようにといったんだ」といいました。

「心配しないで、安心しておやすみなさい。朝になればよい知恵も浮かぶでしょう」

蛙の妻は、そういって王子をベッドに入れました。それから、こっそり、蛙の皮を脱ぎました。すると、蛙は、かしこいワシリーサ姫になりました。その美しいこと。

ワシリーサ姫は戸口の所へ行つて、大きな声でよびました。

「わたしのばあやたち、みんな来て、やわらかな白パンを作つてちょうだい。わたしがお父さまのところへいただいていたようなふんわりしたパンを」

あくる朝、イワン王子が目覚ますと、もうちゃんとやわらかな白パンができあがっていました。それは、昔話には聞くけれど、とても想像できないほどおいしいパンでした。

イワン王子は、よろこんでパンを王さまのところへ持っていきました。王さまはたいそう喜びました。

しばらくたったある日、王さまは、また王子たちを呼んでいいました。

「あしたの朝までに、わしに絹の敷物を一枚ずつ織るようにと、おまえたちの妻に伝えてくれ」

イワン王子はうなだれて屋敷に帰りました。蛙の妻は、

「どうしてそんなに沈んだ顔をしているの。お父様から何かきついお叱りを受けたの」とききました。イワン王子は、

「父さんがおまえに、あしたの朝までに絹の敷物を作るようにといったんだ」といいました。

「心配しないで、安心しておやすみなさい。朝になればよい知恵も浮かぶでしょう」

蛙の妻は、王子をベッドに入れると、蛙の皮を脱ぎ、かしこいワシリーサ姫になりました。それから、戸口の所へ行つて、大きな声でよびました。

「わたしのばあやたち、みんな来て、絹の敷物を織つてちょうだい。わたしがお父さまのところへ敷いていたような敷物を」

あくる朝、イワン王子が目覚めると、もうちゃんと敷物ができあがっていました。それは、昔話には聞けけれど、とても想像できないほどりっぱな敷物でした。

イワン王子は、喜んで敷物を王さまのところへ持っていきました。王さまはたいそう喜んでいました。

「おまえたち、ここへ妻をつれておいで。宴会をしよう」

イワン王子は深くうなだれて屋敷に帰りました。

「どうしてそんなに悲しんでいるの。お父様からなにか面白くないことを聞かされたの」

「父さんが、宴会をするから、おまえをつれてくるようにといったんだ」
蛙の妻はいいました。

「心配しないで、あなたは先にお城へいらつしゃい。わたしは後から参ります。大きな地響きが出て、大きな馬車の音が聞こえたら、みなさんにこういつてください。

『ぼくのかわいい蛙の妻が、小箱に乗つてやつてきた』ってね」

さて、上のふたりの王子は、美しく着飾つた妻をつれてお城に行きました。そして、イワン王子がひとりやつてきたのを見ると、

「おまえ、どうして妻をつれてこなかったんだ。ハンカチにでも包んでくればよかったのに。おまえはどうやってあんな美しい妻を見つけたんだい。沼じゅう探しまわつたんだらうな」といつて、からかいました。そのとき、大きな地響きが出て、大きな馬車の音が聞こえ、お城じゅうがガタガタとゆれはじめました。みんなはおどろいて騒ぎだしました。すると、イワン王子が、

「ぼくのかわいい蛙の妻が、小箱に乗つてやつてきたんだ」といいました。

そのとき、お城の門に、六頭立ての金の馬車が着きました。馬車から、かしこいワシリーサ姫がおりてきました。その美しいこと。昔話には聞けけれど、とても想像できないほどでした。

イワン王子はワシリーサ姫の手をとってテーブルにつきました。やがて、宴会が

始まり、お客たちは、にぎやかに飲んだり食べたりしました。ワシリーサ姫は、お酒を一口飲んで残りをそつと左のたもとに注ぎいれ、鳥を一口食べては骨をそつと右のたもとに入れました。二人の兄嫁たちは、まねをして、お酒を左のたもとに注ぎいれ、鳥の骨を右のたもとに入れました。

やがて、ワシリーサ姫と王子は踊りはじめました。ワシリーサ姫が左のたもとをひらりとふると、湖が現れ、右のたもとをふると、白鳥が湖に浮かびました。みんなは、美しさに目を見張りました。それを見て、兄嫁たちも踊りはじめました。兄嫁たちが左のたもとを振ると、お客たちにお酒のしぶきがはねとび、右のたもとを振ると鳥の骨が飛びだして、王さまの目に当たりました。王さまは怒って兄嫁たちを追いだしてしまいました。

イワン王子はこっそりお城を抜けだして家に帰りました。そして、蛙の皮を見つけると、火に投げこんで焼き捨ててしまいました。

やがて、かしこいワシリーサ姫が帰ってきましたが、蛙の皮がありません。ワシリーサ姫は悲しんでイワン王子にいました。

「あなたはなんということをしてしまったの。もうしばらくしんぼうしてください。それから、私はいつまでもあなたのおそばにいられたのに。こうなったら、もう、お別れしなくてはなりません。あなたは私を、遠い遠い地の果ての、不死身のコシチェイのところまで探しにきてください」

そういつたかと思うと、ワシリーサ姫は白鳥になって窓から飛び去りました。

イワン王子は驚き、四方にひれ伏して神様に祈り、泣き叫びました。それから、足の向くままに、ワシリーサ姫を探して、旅に出ました。

短かったか長かったか、どこをどれほど歩いたか、夢中で歩いていくうちに、ひとりのおじいさんに会いました。おじいさんは、

「やあ、お若いかた。何を探してどこへ行くのかね」とききました。イワン王子がこれまでのことを話すと、おじいさんはいいました。

「ああ、イワン王子。どうして蛙の皮を焼き捨てたんだ。かしこいワシリーサ姫は、父親よりずっとりこうに生まれついていたがために、父親にねたまれて、三年のあいだ蛙にされてしまったんだ。さあ、あんたにこの糸玉をあげよう。糸玉が転がっていく後について行きなさい」

イワン王子はおじいさんにお礼をいい、糸玉について歩きだしました。糸玉はころころと転がっていきました。しばらく行くと、広い野原でくまに会いました。イワン王子が、

「よし、あいつをしとめてやろう」と、鉄砲をかまえると、くまは、

「命だけは助けてください。いつかあなたのお役にたちますから」といいました。イワン王子はくまを撃つのをやめ、また糸玉の後について旅を続けました。

しばらく行くと、頭の上をかもが一羽飛んでいました。イワン王子がねらいを定めると、かもは、

「わたしを撃たないでください。いつかあなたのお役にたちますから」といいました。イワン王子は撃つのをやめ、旅をつづけました。

するとこんどは、うさぎが走ってきました。イワン王子がねらいを定めると、うさぎも、

「わたしを撃たないでください。いつかお役にたちますから」といいました。イワン王子は撃つのをやめ、糸玉について、先へ進んでいきました。

海辺まで来ると、ミルクの川がキセーリの岸の間を流れていました。イワン王子は、お腹いっぱい食べたりに飲んだりして、元気になって旅を続けました。しばらく行くと、砂の上にカマスが打ち上げられていました。カマスは、

「わたしを助けてください。どうか水の中にもどしてください」といいました。イワン王子は、カマスを海に放してやりました。

長いこと歩いていくうちに、糸玉は、一軒の小屋の前まで来て止まりました。小屋は、にわたりの足の上でくるりくるりとまわっていました。イワン王子はいいました。

「小屋よ、小屋。もと通り、おまえのかあさんが建てた通りに、海に背を向け、私の方に表を向けて、とまれ」

すると、小屋は、海に背を向け、イワン王子のほうに表を向けて止まりました。イワン王子が小屋に入っていくと、レンガを高く重ねたペーチカの上に、ババ・ヤガーが寝そべっていました。ババ・ヤガーの足は、骨と皮ばかり、鼻は天井に届くほど高く、二本の鼻汁を床まで垂らし、歯をむきだして、イワン王子をにらみつけていました。

「おまえさん何の用でここに来たのかね」

ババ・ヤガーが尋ねると、イワン王子は、

「どうか食べ物と飲み物をください。それから、お風呂に入れてもらえませんか」といいました。

ババ・ヤガーは、イワン王子に御馳走をだし、お酒も飲ませ、お風呂にも入れてやりました。イワン王子が、妻のかしいワシリーサ姫を探していることを話すと、ババ・ヤガーは、いいました。

「ワシリーサ姫は不死身のコシチェイのところにいるよ。だが、姫を助けだすのは、ひと苦労だ。コシチェイをやっつけるのはなかなか骨が折れるからね。コシチェイの命は針の先にあつて、その針は卵の中に入れてあり、その卵はかみがくわえているんだ。そのかみはうさぎのおなかの中にいて、そのうさぎは箱の中にいて、その箱は高いかしの木の上に隠されているんだよ。だから、不死身のコシチェイは、そのかしの木を自分の目のように大事に守っているのさ」

ババ・ヤガーは、かしの木の生えている所を教えてくださいました。

イワン王子は、かしの木の下までやってきました。どうやって箱を手に入れようかと、とほうに暮れてしまいました。見上げていると、とつぜん、くまが現れて、

かしの木目がけて突進し、根こそぎ倒してしまいました。すると、箱が落ちてばらばらに壊れ、中からうさぎが跳びだしました。そのうさぎを別のうさぎが追いかけて、ひきさきました。すると、うさぎのおなかから、かもが飛び立ち、空高く舞いあがりました。そのかもを別のかもが追いかけて襲いかかりました。かもは卵を落としました。卵は海の中に落ちてしまいました。イワン王子が悔しがっていると、カマスが卵をくわえて泳いできました。イワン王子は卵を受けとって、すぐにくだいて針を取りだし、針の先を折りとってしまいました。

コシチエイは倒れて死んでしまいました。

イワン王子が、ババ・ヤガーの小屋にもどると、ババ・ヤガーはいいました。

「ここでしばらく待っていると、ワシリーサ姫が、やって来る。そしたら、おまえさんは、ワシリーサ姫をすっかりつかまえるんだよ。ワシリーサ姫はいろいろなにすがたを変えるけれど、こわがってはいけない。姫が鍾にすがたを変えたなら、その鍾をふたつに折って、前と後ろに投げてこういうんだ。『今までは鍾であったが、これからは、わたしの後ろに白樺生えよ。わたしの前には、うつくしい乙女よ立て』とね」

ワシリーサ姫がやって来ました。イワン王子は、ワシリーサ姫をすっかりつかまえました。そして、ワシリーサ姫が鍾にすがたを変えると、それを半分に折って投げ、さげました。

「今までは鍾であったが、これからは、わたしの後ろに白樺生えよ。わたしの前には、うつくしい乙女よ立て」

そのとたん、イワン王子の前に、美しいワシリーサ姫が立っていました。

ふたりは末永く幸せに暮らしましたとき。

原話：『ロシアの民話』金本源之助訳／岩崎美術社
再話：村上郁